

かいきゅう 小太夫
懐郷 408

つづ 187
返く 117
抱く

2,894^P

1265^P 紀上 416^P 由 2885^P 4/5 末
宇治谷(上) 231^P 前 震 傷口 内 の けが 24 日 いた、
2885^P

望郷 ^{ほうきやう}

たっぺんのくに

日辺国(近畿地方)にも、穏やかな日々が

続

2885^P 4/5 末
宇治谷(上) 231^P 前 震 傷口 内 の けが 24 日 いた、
2885^P

あめのいた

天下は平らかであり、何事も無い毎日であ

た。(仁徳紀六十七年条)

長年にわたり、延々と打ち続いた戦時体制

下の緊張と困窮とから、突然、解放された

いま、人々は、何故か、頻に、住み

なれた懐かしい故郷を想うようになってい

た。

「父や母はお元気か」

「友はどうしているか」

大倭国(九州・山口地方)を後にして、

この遙かな異郷の地へやってきた人々の胸は

ギュツと締めつけられるように疼いた。

それは、支配者だけでなく、日辺

国(近畿地方)へ降ってきた者達の誰かが抱

く、望郷の思いであつた。

「に」34 止むね
↓
（と）

夢幻^{えんげ} 夢^{ゆめ}とまぼろし

2.895¹ - 1/2

トル

むら 村
みやこ 都
ようす 様子
か

美しい山や川、繰返し繰返し脳裏に浮んだ。

また、幼い日の思い出なども、まるで昨日の

ことのように鮮やかに瞼に映じた。

え、いったい。

「大倭国。なつかしい故郷」

「天上の国の都。麗しい洛陽の都よ」

それぞれの任務や生業に忙しい日々を過す

ているとはいえ、人々は時として、

いつのまにか、母の乳房のぬくもりのような

心地よい甘くて懐かしい思い出に満ちた夢

幻の中に、身を漂わせているのだった。

その如何とも断ち難い望郷の念は

切々として人々の胸に迫り、人々の心を揺さ

ぶり続けた。

＊

異にやがて、一つの現象が起った。

大倭国（九州地方）から日辺国（近畿地

方）へ天降って来ていた人々はるか西方

すくをびに
少彦名 紀上131 5行

(④ 142^p)
④ 157^p 1/3

せつけん
席巻 1247^p

2,895^p - 2/2

「1107」 ④ 544^p - 5/ 新(1) 133^p上

この物語の荒筋第二編です。述べたが

大己貴・少彦名等は、

阿蘇の中岳は三輪山に、外輪山は生駒山

二上山・金剛山等々の山々に、

台国のタラマが原の都(託麻原)は母根国の都(難波)に

相当する

と考えたようである。

そして、西の銅剣銅矛文化圏(九州地方の

勢力)が、東の銅鐸文化圏(中国・近畿地方

の勢力)を併合した直後ころ、大倭国

(九州地方)から日辺国(近畿地方)へ天降

って来た人々は、はるか西方の故郷を想う懐

かしさのあまり、大己貴・少彦名等の考えを

を更に一層おし進め、

近畿地方の各地の名を、九州地方の各

地の地名と口全く同一の名称で呼んだ

と思われる。

と

次頁
から

米

人	家
に	に
似	似
て	て
い	い
る	る
し	し
と	と
か	か
↑	↑

思
う。

そのと同様 どうよう
大倭国 やまとのくに から 日辺国 ひのくに へ 下 くだ っ て

形^{けい}とよく似た^{にた}土地^{ちど}を、近畿^{きんぎ}の地^ちに見^み出して^だ、
 きた人々は、素朴^{すぼく}に、住^すみ馴^な染^んんだ九州^{きゅうしゅう}の地^ち
 は、
 地名^{ちめい}を名^な付^つけ、その土地^{ちど}に、九州^{きゅうしゅう}の郷^{きょう}土^ど名^{めい}と全^{ぜん}く同^{どう}
 じ、
 だろ^う。親^{おや}みを入^いれ込^こめて呼^よんだの^の

仁徳朝当時の日辺国の人々は、大己貴・少彥名の頃
 とほぼ同様々
 仁徳朝当時の日辺国の人々は、大己貴・少彥名の頃
 とほぼ同様々

十坪の小さい本

「大和のくさし」 日本交通社 70頁に
二月堂 実忠和尚

2,896P-3/5

大和 狭井 若狭井」とルビ有る

因みに述べる、その昔、
若狭湾と琵琶湖は、地中でつながって
いる。✓
と考えられていたのかも知れない。 (第375・376頁参照)
例をあげてみよう。
若狭の水と、奈良東大寺の二月堂にある若狭井とは、地下で通じているという。
「今から千二百年ほど前、インドの実忠和尚という僧侶が日本へやってきた。はじめ博多へ着く予定だったが、たかだ山嵐のため若狭へ福井県西部に着いた。の東大寺へ入った和尚が、二月堂で修二会合のゆるいお水取りをはいめた。毎年二月一日から十四日にかけて、若狭の瀬の水を、奈良東大寺二月堂へお水送りをする。行事が、丹後若狭路、邦光史郎、保育社というのである。」
昭和五十四年六月五日発行「三〇頁、一二〇頁参照」

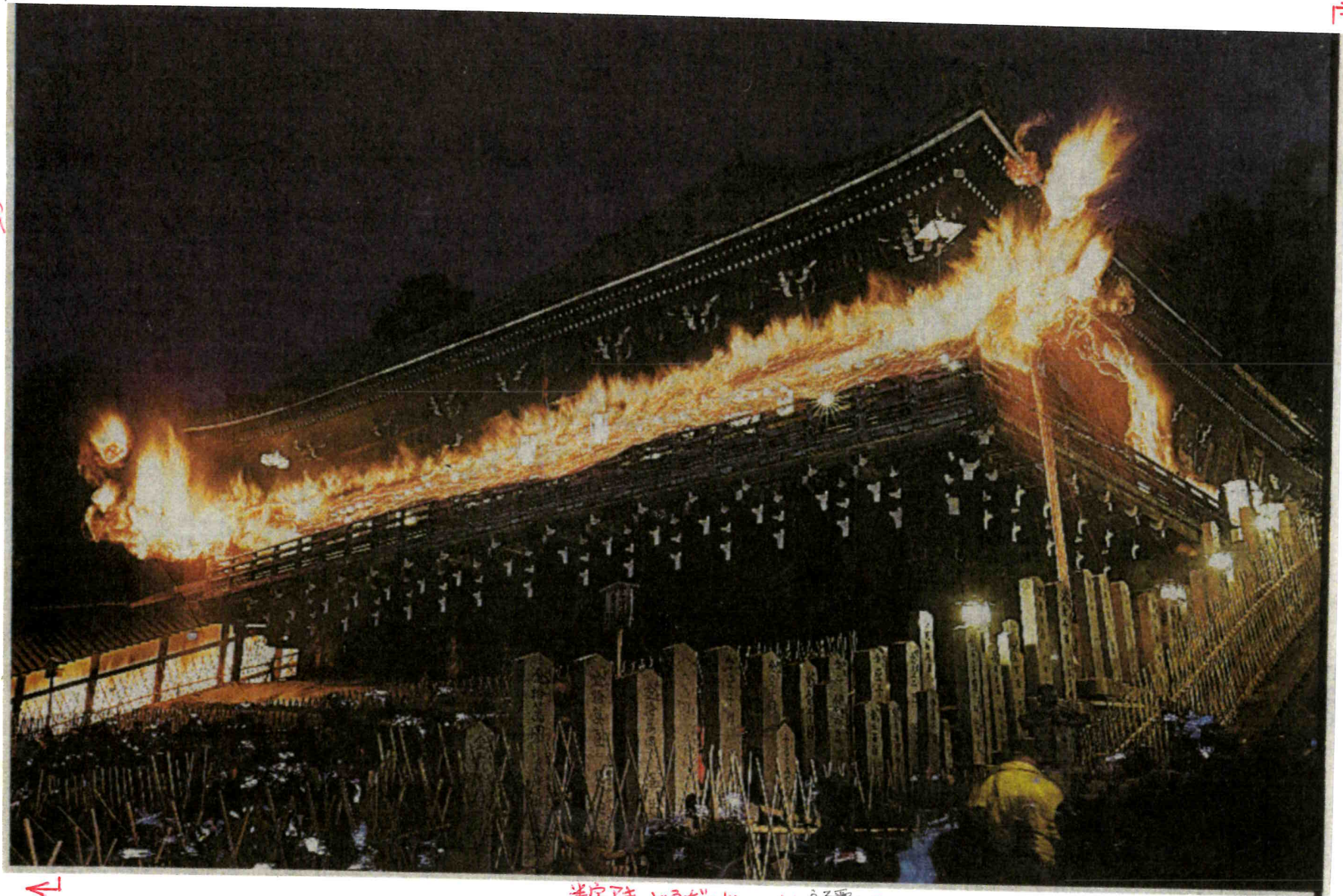
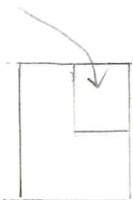
カット
←

2,896P- 4/5

カット
→

・カラー

・頁の右上
(1/4)に、
はみ出して
大きく掲載
下さい。



←

13Q4

14Q4

写真図版 495 奈良^{半字アキ}東大寺^{どうだい}の修二会^{しゅうにえ} (お水取り^{みずと})

← 「しゅにえ」です
「しゅうにえ」でない。 →

『朝日新聞』平成28年3月2日付 <春^{はる}待^{まち}ち焦^こがれる> 参照^{さんしょう}

半字アキ

214

〔2〕大分県別府温泉山「連見の湯」の湯が下
「下桶」(地中にある桶)を流水下り「愛媛
県道後温泉山の湯と「湧き出すのだとい
う。(「伊豫國風土記」逸文「八湯泉糸」参
照)
〔3〕欽明天皇の御代「~~夢形ノ池~~」(「~~夢形ノ池~~」
は「肥後國鹿本郡」(「~~夢形ノ池~~」で出現された「
神皇正統記」(「~~夢形ノ池~~」に記されている。「
第二編「八幡神」において既述)
「この地には、円台寺」という天台の大伽藍
藍かあつたといい、周辺で「その名残の多
くの遺跡が確認され、
「近傍に大きな洞窟があり、
「八幡」(「~~夢形ノ池~~」)「~~夢形ノ池~~」
「荒木精」(「~~夢形ノ池~~」)「~~夢形ノ池~~」
発行「七三頁参照」)

(*)

荒第2編に於て記述②2898P-2/2
同又②158P-4/ 高瀬の定地経919° 和泉山脈 高瀬地帯 25P
熊ノ岳 160° ②161°

2.897P-1/3

葛城金剛山を高天山と云う
地経936° (北緯41°30'N) ②158P-2/2

龍田川の東、龍田の北方に從其える松尾山(三一六M)を主峰とする
山丘一帯の総称だったのである。

龍田山に生駒山の東、白川の北岸にある。龍田山に生駒山の東、泊瀬川の北岸にある。

和泉山脈(金剛山脈)に似ていると思つた。熊ノ岳(金峰山)の山塊を、生駒山の山塊

宇土半島の山々は、金剛山から加太へ至る。人々は、次のようにも對比した。

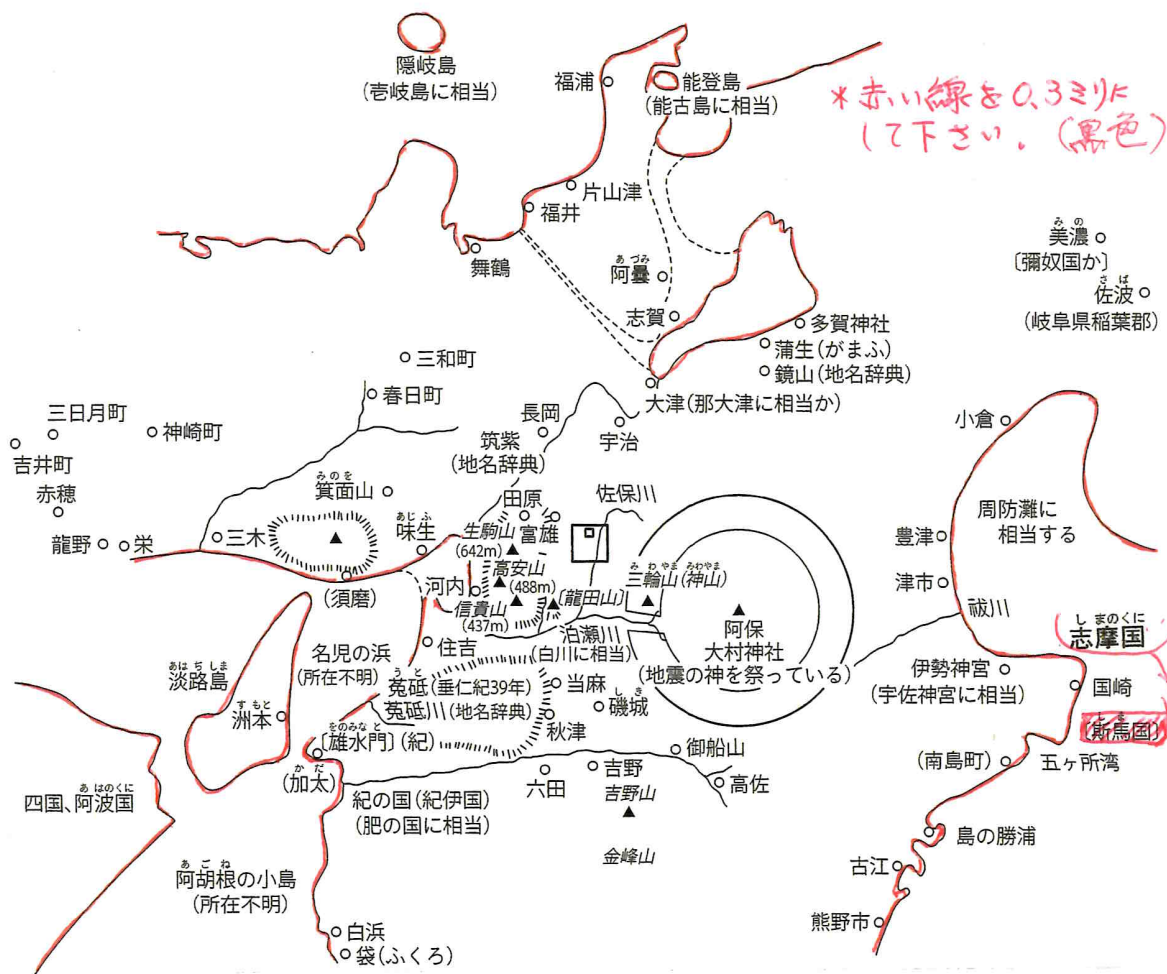
九州の地形と近畿の地形とが全く同一ならば、何も問題など起らない。この二つの地形は、いれただけの微妙に、ほんの少しばかり異

と想像される。へこみに、ちよつとした混乱が生ずるようになつていつた。と想像される。

ところが、幾年月を経た頃からであつた。

見出す 擬する 216
松尾山は 高瀬の定地 919° 和泉山脈 高瀬地帯 25P
熊ノ岳 160° ②161°

右頁全面に、大きく掲載下さい。

$$2,897^P - 2/3$$


(第18回と同一)
第375回

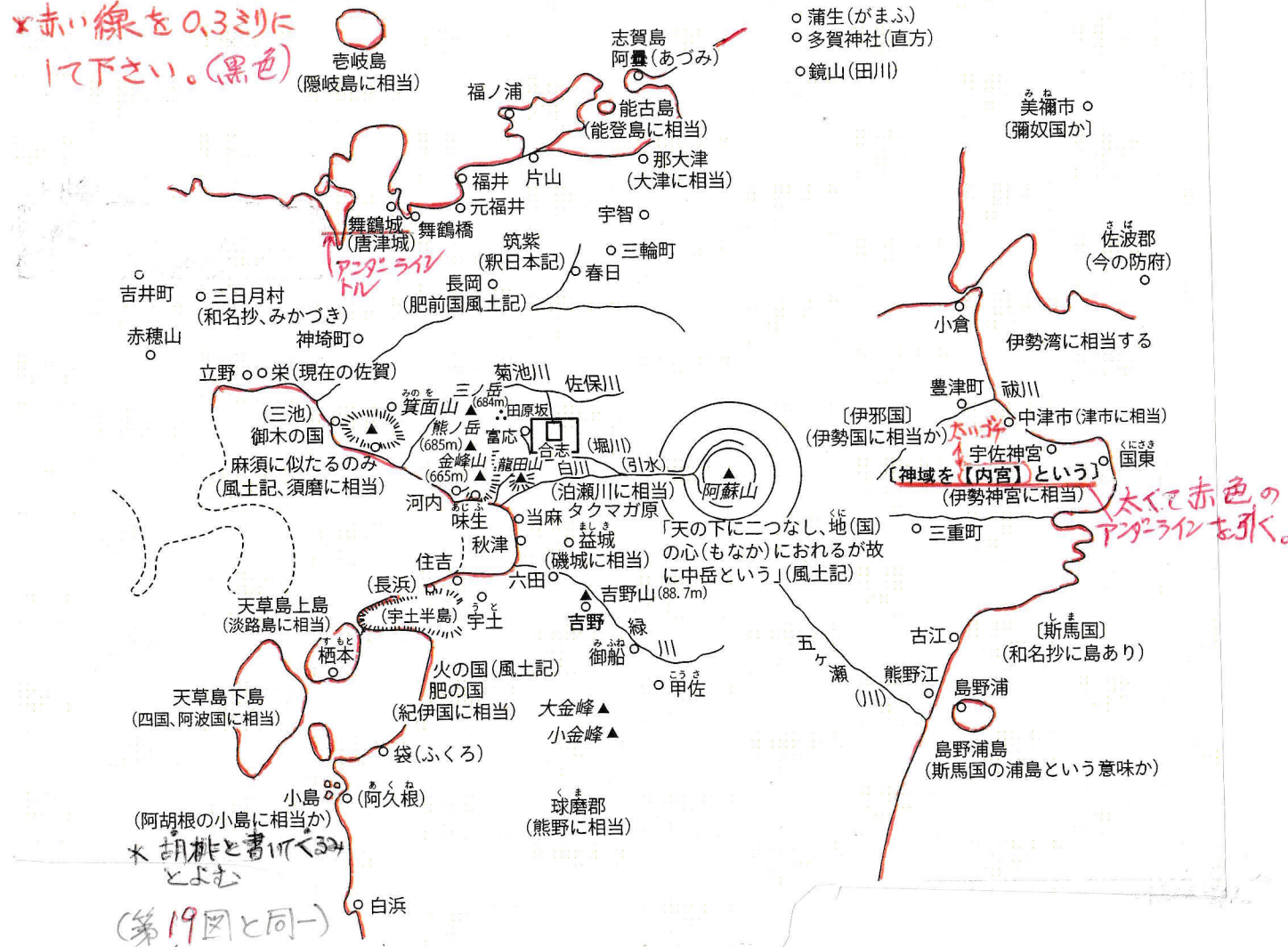
大和国を中心とする近畿の地図

14QG —
中心3.1かけ

・左頁全頁に、大きく掲載下さい。

2,897^p - 3/3

★赤い線を0.3ミリに
1て下さい。(黒色)



14QG → 第376図
中心ふりわけ



写真図版 6 肥後国の『龍田山』(151.6^{たつたやま}ね) および『白川』^{しらかわ}

- ・ 熊本市街地 (明午橋^{めいごばし}) から、北東方向を望む。
- ・ 子飼橋^{こかいばし}が見えている。左側手前には、藤崎八幡宮^{ふじさきはちまんぐう}の森がある。

松崎順子さん、平成21年 6 月撮影

下 484
持後天皇

151
114

2899

2,898 - 1/2

5410 3375
1467 市町村等名大鑑 名賀郡 地名 1117
161 阿保(あほ) 3374 167 2630 - 1/2, 3375

932
125

また、阿蘇の外輪山は、
三輪山、多武峰、等の山系。鈴鹿山脈、
琵琶湖南岸の山々と、幾分似ている。
阿蘇の中岳は、この物語の荒筋、第
二編へ繰返される二朝の慣例において、
伊賀盆地内の小丘、三重県名
賀郡青山町阿保の、大村神社に、地震の神を
祀る神社の地に相当する。
白川南岸の、タクマガ原を、大
和盆地南部の大和三山一帯(高市郡あたり)に
擬して考えた。
なお、日本書紀の神話中に、天高市と
記されており、
往古の人々は、天上の国の、タカマガ原
を意識して、大和国の高市のことを、天高市
とも称したのである。
と推察される。(神代紀(上)第七段一書第一。
同第九段一書第二。日本書紀(上)日本古典
文学大系、岩波書店、一五一頁、注二七参照)
(口)大和三山付近の、藤原京を都とされた持統
天皇の国風謠号は、高天原廣野天皇山である。

狂心の陣
新やうー 196[°]_F
197[°]_F

新和(1)-223^上
 上 松(カ)を注(マ)_P224^上下
 (1)-223_P224^上下
 新和(1)-142下6/19,

2,898¹ - 2/2 新和(1)-142^{PA} 6件 ~ (24)
101-197^上末

火も、ともこの当時、奈良盆地北端部は、ただた
 だ、大なる湿地帯だったようである。『荒筋』
 第二編『東・西の同一の地名』において既
 述（ミウダイ）
 火だから後代「平城一帯を曰（ミウダイ）
 する為（ため）に、多（た）大（だい）の（ミウダイ）
 うう。『荒筋』第三編『狂心の渠（みち）』
 について、
 トル
 7 既述（ミウダイ）

の地域に該当する。
 北岸に位置する。奈良盆地北端域（後の平城）
 の都は、甚だ不揮なことに、
 阿蘇外輪山の切欠部を通って西流する。
 川の間の切欠部を通って西流する。
 川に相應する。

大少
元解
出元

④ 1919^P 前に詳しく
述べた。2,899^P - 1/4

照

阿蘇の外輪山の切欠部を通つて西流している

る
コ
白川
山をへ
――
三輪山
と
多武峯

との間の切欠部を通して西流している。口泊礫

川 比 ⑪ 初 瀬 川 へ 見 立 て た。

そいて

菊池川は、淀川に、

筑後川は、
加吉川
もくは淀川
に

山袋山は、六甲山に、

その水壁言えらねる。反なるが。其筋第

二縮において

トル
ヤ
コ
エ
ン
*

大和山

天
 二
 の
 国
 一
 大
 立
 同
 一
 ニ
 五
 十
 の
 天
 同
 具
 山
 の
 山

えんどう
 くら
 やま
 との
 くに
 トル
 あめ
 の
 か
 ら
 や
 ま

さ
 ら
 に
 人
 を
 后

天の國に天の國に

[illegible]

片断に倭国
あまくた

国に天陰いたし

[illegible]

山 谷 香 山 氏 預 臣 土 言 近 之 參 則
 かぐやま

川章／番山、の年はおいて賜近
てんしやう　くさ　だいち　ひときわ

H30(2018)7.25(水)~7.27(4回) 近国名の南10kmに
 令和元(2019)7.25(木)~7.26(4回) 五ヶ谷川 3043¹/₂
 1F 7/26
 26 7/26

2,899-2/4

5856 5874
 3,048 4/4

ものすこ
 物凄
 きょうそう
 形相 2198
 573

から想像される巨人の姿を念頭において
 近畿の地に、身の毛のよだつような恐ろ
 い形相の大男の姿を思い描いた
 ように推察される。(近畿地方の大男)
 とはいえ、この大男について、
 はまだ述べる時でない。
 追って詳述したい。(第九十六章へ世にも
 恐ろしい形相の大男の項において述べたい)
 東西にある二見浦の夫婦岩は
 微笑ましい例をあげよう。
 ①伊勢の二見浦の夫婦岩は、よく知ら
 れて豊後佐伯にもほぼ同様の姿形をしてい
 る。二見ヶ浦の夫婦岩がある。鏡像関係
 ②の様子、相称関係は、写真因版 496・497 参
 になつてゐる。(写真因版 496・497 参
 照)
 往古の倭人達は、この事実に感動を覚えて
 両地名共二見浦と呼び、
 大・小の岩を繋ぐ「注連縄」を張り渡すようになったのだ
 なかうか、などと想像される。

ヨゴレ

2,899^P - 3/4

ヨゴレ
↓↓

ヨゴレ ↓ * 次頁の $l_1 = l_2$ にしておいて下さい。

空のヨゴレをトル



・カラー

・右頁の上半分に、
大きく掲載下さい。

1424

写真図版 496

伊勢^{いせ}二見^{ふたみ}浦^{うら}の夫婦岩^{めおといわ} (* 豊後^{ぶんご}へ二見^{ふたみ}浦^{うら}と^{きやうさいほう}左右対称^{さうぶたいしやう}になっている)

1364

『日本の神社』伊勢神宮 デアゴスティーニ・ジャパン 2014年2月25日発行 27頁参照

は かつて伊勢神宮に参拝する前には、二見^{ふたみ}浦^{うら}で^{ふみ}禊^{みそぎ}するのが^{なら}習^{なら}わ^なれた。

4 夏至^{げし}の日^ひ、夫婦岩^{めおといわ}の真^まん中^{ちゆう}から日^ひが昇^{のぼ}る。

223^P

「伊勢神宮」神社紀行 95頁

お願い。縦方向の黒帯を見立たないようにして下さい。 2,899P 4/4 カラー・左頁の上半分に、限定一杯大抵はみ出させて下さい。



まわりの色にあわせて下さい

1329 1429 写真四版 497 豊後 二見ヶ浦の夫婦岩 192
日本の山河④『大分』奈良本辰也監修、国書刊行会、昭和52年2月20日発行、74頁
佐伯市、JR浅海井駅のすぐ東、雄岩(約17m)、雌岩(約10m)がある。平成6年(1994)のギネスブックに掲載された。
毎年12月には、大勢の人々により巨大な注連縄が張られる。この注連縄は、全長65m・最大直径15cm・重さ2トンあり。
ここから見る日の出は絶景である。元旦には、初日の出を見る為、多くの人々が訪れる。第8巻)224P

みらり 小枝
著す 831
了 753

小野小町
村凡の吸くはつ478

南口地8号 23
代上228 神武215
カセ 小町239

2,900 P

山飛鳥・遠飛鳥 3145
3521

大和国ヤマトの二ヶ所の日秋津あきつ比

日秋津あきつ比という地名は、大倭国ヤマト（肥後国）

のタクマが原には、一ヶ所ちめいかたないか、

大和国には、二ヶ所ある。以下第12 18 19 図参照

・肥後国の日秋津あきつ比は、タクマが原の西端

（江津湖の東岸）にあって、緑川南岸

の「吉野」からも近いところ（約七き）に位

置いてある。

・一いっほう方、大和国には、次の二ヶ所に日秋津あきつ比

がある。

①日大和国南葛城郡かつらぎ（旧葛上郡）の村。

・明日香あすかの西方、御所みよ所せあたり、孝

安天皇の秋津鳥宮あきづのみやの址がある。

・孝昭・孝安二帝の都城にして、秋津鳥の

名元より著あらわれ、終はつに国號となる。村名も亦

ここに不出いず。大字地の内に孝昭天皇池心の宮

址あり、大森オホノ古原又蓬原ヨモギという。又、武

内大臣の空の墓あり、或は玉手たまて（坂上）村に

市町村誌
149 P

市町村誌
149 P

地名録
1682 P

2903P 1199

あるいは
すいかに

万2-139P
万3-299P

秋津 万辞典 503P 帝口地名 23P

2,901P

次頁から

在りともいう

といわれている。(「帝国地名辞典」太田爲

三郎、名著出版、(秋津)参照)

② 大和国吉野郡中庄村大字宮瀧に近傍の地名。

● 万巻六一九一一、同六一九二六、同十二一

三〇六五に、

「吉野の秋津(蜻蛉)」

と歌われている。

■ あるいは、

へ御所の秋津も、吉野の秋津も、

共に、天上の国(肥後国)の秋津に由来して

いるのかも知れない

と想像される。

■ このうみに、肥後国の秋津に周辺の地名

と、大和国の吉野の秋津に周辺の地名とを

見較べてみると、次のように、極めてよく似

ているように思われる。

④2903^P二つの形^{あまの}「トル」
金峰山 607^P
広607 地355 576^P

2,902^P

石1-338^P(22)

150^P六田

44^P

丹生宮 市町村名 44^P

前頁

肥後国緑川の南岸に「吉野」があり、
川の南岸に「吉野」がある。

肥後国吉野の西方に「丹生宮」があり、大和

国吉野に「丹生」がある。(万巻十三三三三)

肥後国吉野の西方に「六田」があり、大和

国吉野の西方にも「六田」がある。(万巻七

一一〇五、九一七二三)

肥後国吉野近くには、「甲佐」・「甲佐岳」

がある。

一方、大和国吉野には、「象」・「象山」

万巻一七〇、三一六、六一九二四)があり、そ

て又、「高佐」という地名もある。(吉野神

宮の東ハ、五万分一地図参照)

肥後国吉野近くに「御船」があり、大和国

吉野に「三船山」がある。(万巻三一二四

四、六一九一四)

肥後国吉野の南に、「大金峰」(一三九六)

小金峰(一三七七)とが、南北に連なっている。

一方、大和国吉野の南に「金峰山」(奈良県

吉野山奥千本から、南方の大峰に至る連峰

があり、その最高峰は山上ヶ岳(一七一九)

である。「金の御岳」ともいう。(「広辞苑」(金峰山

参照)

※

大和国

2907 1/2 109

2913

219
聖徳紀上 392

2882

20

2903
紀上 69

隋書卷四

紀上 143
紀上 142

1447.12(土)

仁徳天皇の陵
聖徳紀と尊称されて敬ゆれた仁徳天皇

は、四二七年八月十五日に崩御された。(仁徳記)

(仁徳記)

思い返せば仁徳天皇は、あの窮乏の時

人々と共に辛苦に耐え、善政を行われ

身して一まことに鮮やかな外交手腕によつ

て、長期にわたる高句麗との戦いを終結させ

我国に平和をもたらされたのだった。

慈み深い仁徳天皇がお亡くなりになったとき人

々はどんなに嘆き悲しんだことであつたらう

か。

数年間の殯(死体を葬るまでのあいだ)安置

しておくと、屍は船上に置か

れ、日田国(近畿地方)から天上の国(九

州地方)へ運ばれ、そして、筑紫日向

可愛元山陵に手厚く葬られたのであろう。

なお、瓊杵尊の陵墓について。

・陵墓要覧に、鹿見島県内市宮内町字脇

園

「隋書倭国伝」神代紀下第九段本文参照

2007年12月10日

いせき 2974P
事績 あみ の なし けたことかろ 2,904P

地851 951P

紀上143P
え埃 紀上142P 10行

・延喜諸陵式に、^{えんぎしよらうしき}
日向、^{ひむか}埃山陵へ^{えのみやまき}天津彦彦^{あまつひこひこ}
火瓊瓊杵尊。在^あ日向国。無^な陵戸^{らうこ}。とある。

* 往古^{おうこ}においては、九州全体を「日向」と称^{いふ}したようである。

（「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版へ橘^{たちばなの}え小門^{おと}址^あ参照）

もつとも一説^{いつせつ}に、「宮崎県延岡市の北方^{のへんぽう}可愛糸^{えい}」を遺跡地とする

という。↑↑↑↑↑「日本書紀」(上)日本古

典文学大系、岩波書店、一四三頁注一一参照

(*)

その後^ご、いつか時移り^{ときうつ}↓聖徳太子

の構想^{こうさう}がまとまったとき、へ仁徳天皇の数々の事績^{いせき}は、きっぱりと三

つに分けられた。の^おではなか^なとであ^あう^うか。

恐らく、

電^{でん} 陵戸^{らうこ}

紀上142P 97ルビ

天照陵 2906P
紀上 416P

神功 106P
4070P

2,905P-1/3

格 386P 紀上 142

①一つは、天照大神の孫日瓊瓊杵尊にまつ
ける神話とされ、天孫降臨を中核とする
威厳ある話として記されていった。
また、瓊瓊杵尊の山陵は日向(九州)に
在る」と記述された。
②次の一つは、神功皇后の孫日仁徳天皇の
御世の二とされ、仁徳天皇の御陵は、
い慈愛あふれる話が書き綴られていった。
日聖帝仁徳天皇の御陵は、当然、畿内に
あるべき」とされ、いまの堺市大仙
町に百舌鳥野陵(俗に大仙陵という)が造ら
れていった。
③そして残る一つ(神話)として、人
皇の御世のこととしても記し難い話
止むなく、打ち捨てられた、
と想像される。
仁徳天皇陵は、全長四八五び、後円部の高
さ三六び、前方部の高さ三四びの前方後円墳
で、三重の堀をめぐらし、面積では世界最大
である。そしてその築造に当っては、延一ハ

小町下

あまてすおほみかみ

日瓊瓊杵尊

ちゅうじん

前頁 11行

大仙陵

2901-2/2 115行

220

230

↑

220

・カラー
・右頁全面に大きく掲載下さい。

① 28061-2/2
→ 佐々木はちみ
→ 参田八幡

カラー



2,905P-2/3
2,905P-2/3
2,905P-2/3

2,905P-2/3
2,905P-2/3
2,905P-2/3

写真図版 498 応神天皇陵 (1990年9月27日撮影)

『航空写真集 飛んで飛んで大阪』大阪新聞社、平成3年(1991年)1月30日発行

292頁参照
本来、二重に豪がめづらされていた。という。(既述)

① 2805P-2/2 13行
仁徳天皇陵、次頁

① 2945P-2/2

231

カー
左頁全幅に大きく掲載して下さい。

左頁全幅に大きく掲載して下さい。

2,905⁷ - 3/3

仁徳陵の全長は四八五に



232 - 472

仁徳天皇陵 (1990年9月27日撮影)

『航空写真集 飛んで飛んで大阪』大阪新聞社、平成3年(1991年)1月30日発行

330頁参照

三重の堀がめづらされている

前頁204

2,975⁷ - 1/7 24

仁徳天皇陵 前頁

仁徳陵 2,905.1/3
かえき 底 課役 366
紀上 392

三重の
2,906

紀上 392
あさひは

清貧に安んずる 1230
2875 161 2904 115

円部の高さ約三五尺、前方部の高さ約三四尺

〇万人以上を要したと計算されている
という。(写真図版 499) (日本書紀 日本古典文学大系、岩波書店、四一六頁注五参照)
皇の御陵が、一一体どうして、こんなにも巨大なのであうかと疑問に思われる。
仁徳天皇を慕う百姓達が、領さずして土や石を運び、力を竭して競ひ作ったのだろうか。
たしかに、人々の心の内に、そういうた意だか、延一八〇万人以上を必要とする大工事が、百姓達の自主的な労働提供のみによつてなされたとは、到底肯首し難い。
三重の
整然とした様式を誇る壮大極まりなり仁徳天皇陵は、多分、支配者達によつて綿密に計画され、延一八〇万人以上の課役を科せて造られたのであろう、と想像される。
一方、応神天皇陵についてみると、
応神天皇陵は、全長約四二〇尺、後

「量」では「天」の「天」の「天」
天つぎ改行

2880¹/₃ 2.907¹/₂

ように

て、面積では仁徳天皇陵に次いで二番目である
（写真）日本古墳一〇〇選し肥後和男監

修、秋田書店、五六頁参照

とはいえ、朝廷は何故、仁徳天皇陵を天

天皇陵より大きい陵墓としたのだろうか。

以下、この点について考えてみよう。

先に述べたとおり、

へ日辺国（旧拘奴国）の庶人は、仁徳天皇

を聖帝とたたえて慕った

であろう。

ーかなから、

へ聖徳太子の金人の夢告以前の我が国におい

て、仁徳天皇の方か、天神天皇以上に

尊敬されていったとは、考えにくい

ように思われる。

と、こののは、神功皇后や天神天皇、八幡神

を祭神として祀る神社が数えきれないほど無

数にあるのとは比べてみると、一、二、三、仁徳天

皇を祀る神社が、極めて数少いからである。

もともと、我が国においては、神功皇后や天

は5 GM
天照大神

ほうぎく
暴虐 2012

記(四)264

武烈記には多く記されている

2,907^P-3/2

いせき元974

事績 ある人のなとけた
ことかる業績

「あしたう」は
2908^P-7の料

あつ 元
篤(44)

という系譜の

神天皇「ハ幡神」を、篤く敬っていたので
あろう、と推察される。(第37表「神社分類表」参照)
あるいは、
聖徳太子によって「国史編纂事業」が企
図され、「天孫降臨」の筋書きが作られてか
ら以後、天孫瓊瓊杵尊(仁徳天皇)の事績が
突然大きく扱われるようになった。
というのが真相なのではないだろうか。
そして、聖徳太子のその構想によってにわ
かに浮上した「聖帝」仁徳天皇の偉業にみあ
う御陵として、巨大で美しい大仙陵が築
かれ、このようになったのではなからうかと想
像される。
さらに「仁徳天皇およびその子孫
に対する鎮魂」の思いが込められていたの
かも知れない。
①参考までに述べると、
仁徳天皇の皇系が武烈天皇で絶え、
断絶に關連して、こう言われている。
「武烈紀に――きりに見える武烈天皇の暴虐
という系譜の」

仁徳天皇より

同文
③ 3169^p - 1/2
二七

はきょうべつめい
書経の別名

紀下543^{下右}
2871^下

とせつ
途絶 1605^下

2,908^下 - 3/2

紀下46^下
4072^下
2980^下 - 3/3

紀下46^下

こと

仁徳天皇の異母弟

紀上
364^下
622^下

第一期二朝時代の西の継体天皇が
東の日辺日本国の武烈天皇および太子
皇子を共に亡ぼしてはゆたたので、
仁徳天皇の皇系は「武烈天皇で絶えた」
と、このことなのかも知れない。(継体紀二十
五年条参照)
そこで、
(1) 後代の天皇にとって直系の祖先に当る継体
天皇を正当化する為、武烈天皇を「暴君」
として描写し、
(2) 一方、仁徳天皇の皇統を途絶せしめる
たという点について、陳謝の意味から
仁徳天皇を「聖帝」として記述し、その御陵
を巨大なものとした、
のであろう、と想像される。
また、後の時代の読者の注意を、仁徳天皇
条の華やかさや、仁徳天皇陵の巨大さに向け
させて、
「継体天皇の直系の祖先」の方から目をそ

「その」争いの詳細を伺い知ることとは(出来ないう結果として)

2974 同文

教科書 54
こと

2.909^P - 1/3

相違み
29/2^P 159

怪訝 685
不思議で合点のゆめさま

らさせたい、という意向もあったろうか。

米

もつとも、

「応神天皇陵や仁徳天皇陵は、聖徳太子への

金人の夢告の後（七世紀以後）に造られたの

で、あろうし

などと述べる、――おそろく、怪訝に思わ

れるに違いないや

なるほど、従来の教科書には、

「四・五世紀になると、鏡や石製腕輪類が

「だいに消滅し、馬具・甲冑などが多くなる。

応神・仁徳天皇の墓が、この期の代表的なも

のであるし

といったことが記されている。（「日本史」

大阪教育図書刊、昭和四十年六月一日第一刷

発行、五四頁参照）

「それ、

「応神・仁徳天皇陵は、四世紀末から五世

植は「小町」9頁下
輪わ

「古墳時代」(5)
河出書房11には
前四期とある

2,909^P-2/3

226^Pでは須恵器
2915^P
2919^P-1/2

新刊の模写(黄)利外林
未から10^P 濠597^P

「後の五王」80^P
古墳の発掘144^Pに説き及ぼした。
日本の「史」読売181^P

紀元初めにかけてのものとさし、日本古代史の原点であるかのようにならされてきたという。『後の五王』藤間生大、岩波書店ハの頁参照。以下「荒筋」第三編「歴史の改変」において概要を記載。と、ところが近年、宮内庁が仁徳天皇陵の濠の整備工事をしていったとき、須恵器の破片が見いだされた。写真図版523。仁徳陵出土の須恵器の大甕(参照)その結果、東側造出の濠近くで「仁徳天皇陵は、五世紀後半から六世紀にかけてつくられたのではなからうか」という修正学説が提せられた。という。(「朝日新聞」昭和五十五年四月十四日付)「古代天皇陵、聖域ではない」明治大学教授、大塚重氏。また、古代史を推理するうえで関心が集中している「古墳の築造年代」の判定に、植輪の製作技法を応用する研究が発表され、反響を呼んでいる。・古墳に最も多く用いられた円筒埴輪を全国的な規模で初めて検討、時代順に並べて編年

2.909^P-³/₃

古墳の新旧をはかる新しいものとして
 作ったのが研究内容で、学界でも評価が高
 い。
 この研究は、川西宏幸氏が昭和五三年九月
 『考古学雑誌』64巻2号「日本考古学会発
 行」に発表した『円筒埴輪総論』という論文
 である。
 ●円筒埴輪は、数本のタガ(輪)を回らせた
 土管のような形をしていて、せいぜい上
 がらツバ状に開いた朝顔円筒程度の単純な埴
 輪で、古墳に使われる数が非常に多い。古墳
 のてっぺん、中段、下段などにぐりりと並ら
 べ置かれるので、試算すると「仁徳陵」
 では二万本もが必要だった、とさめる。古墳
 築造にあたって用いられていた期間も大変長
 い。
 ●年代推定の具体的方法は、円筒埴輪の製作
 技法の分析ですすめられる。粘土に土を巻き
 あげた埴輪の側面を整える場合の工具による
 なで方の違い、すかし孔の数、焼き方の相違

存命であった

など、いくつかの要素の組み合わせによつて
 各内筒埴輪をまわ五つのグループに分けた。
 ・次に、この五グループを製作技術の発展の
 前後関係から《新旧順に並べ変える》。これを
 第1期から第5期までと区別すると、習題の
 「心神陵」は、第4期にあたる。
 ・第5期は、この時期にならばかなり確かに
 なる須恵器の編年から、六世紀全般にあてら
 れる。
 ・そして、第4期の内筒埴輪を持つ「心神陵」
 「仁徳陵」は、五世紀中葉または後葉に造ら
 れた古墳ということになる。
 ・川西氏は、
 「第4期はかなり幅広くとつたので、その
 誤差が五世紀前葉に大きく食い込む可能性は
 きめめて薄い」と述べている。
 ・つまり「三九四(記)」
 「四二七(記)」の御陵は、
 「心神天皇」や「仁徳天皇」はその天皇が
 とされる時代(四世紀末〜五世紀前葉)

2,910^P - 2/3
910^P 212^P 226^P 期日 554.2.11付
下から3段左

新聞加技主(黄)末10^P
27

よりも、新しい年代に大きくおぼれることにな

る。 (第1表)

という。(「朝日新聞」昭和五十四年二月十一

日付)へ心神・仁徳陵の築造期、定説より新

しい参照)

このように、はなはだ奇妙なところがある、

△雨天皇崩御後、古墳を造るまでの時間の

ずれが、異常に大きい。

という点、次第に明らかになってきつつ

ある。いささか奇妙な情況

■それにしても、

△天皇が薨去されてから、半世紀〜一世紀

ばかりの年月の後に、陵墓を(初めて)築造

する、などということが果して本当にあり得

るのだろうか。

と疑問視される。

・なんとも信じ難い

■それでは、一体なぜ、このような大きな時

間のずれがあるのだろうか。

・普通に考える限り、――納得できる答え

は得られそうにない。

H11.3.28(日) ④ 4091 P 431 (2019) 2.19(水)~19(金) 576 立太子 603年 7世紀初頭 令和元(2019)7.26~7.27(3日)
④ 2919 P 3002 P 3 ④ 2909-3/3 未 疑わしいから 2.910 P-3/3 下 7/27 ④ 2909-1/3
九州→山崎へ入 ④ 3002 P 3 IF 430 (2018) 7.25(水)~7.27(金) 令和2(2020)3.9~3.11(4日) 令和2(2020)11.18(水)~

隠されてる

●とはいえず何らかの理由により、
仁神・仁徳天皇が死去されて長年月経過の
後に、現在の「仁神陵」「仁徳陵」が築か
れた、と考えるべきなのだろう。

●この物語においては、
●仁神・仁徳天皇の御陵は、当初、天上の国
(九州)に造られた。

●聖徳太子への金人の夢告の後(7世紀以後)
現在地に巨大な古墳「仁神陵」「仁徳陵」
が築かれた。

●そして、これらの古墳上には、後代の
学者達に疑義をいだかせないようにする為、
より古い型式を持つ日内筒埴輪がたて並べら
れた、

と考えてみた。『荒筋』第三編『歴史改変』参照
●その日内筒埴輪は、川西氏の編年による
と、第4期(五世紀中葉または後葉)に該当
する、ということなのであろう。

●なお、第五十一章「天皇陵」の第五十二章
へ殉死。殉死の禁の項末尾。第七十六章

「太子の苦悩」、他において追々詳述したい。